

【嫉妬の力】

大阪に誕生した世界遺産（百舌鳥古墳群・古市古墳群）の中でも、もっとも大きな古墳の主とされる仁徳天皇は、文献上、はじめて難波（大阪）に遷都します。奈良との往来には葛城山を通る必要がありました。麓を支配する氏族から皇后にイワノヒメ（磐之媛・磐姫）を迎えます。いわば民間から誕生したはじめての皇后です。現存するもっとも古い歴史を記す『古事記』には、とても嫉妬深い人物であったと記されています。

例えば吉備国（岡山）から嫁いだ黒日売^{くろひめ}を船から降ろし、故郷まで歩いて帰らせました。紀伊国（和歌山）へ出かけている間に新たな妃を迎えられようものなら、儀式に使う葉をすべて海に投げ捨て、難波宮を通り過ぎます。船で淀川を上り、京都経由で実家に戻ろうとします。

でも、なぜ遠回りを？彼女は帰ることが戦につながることを知っていたのでしょうか。当時の支配者が日本を治めていく上で必要とした、他の女性たちとの結婚に反対してはいません。悪口を言うこともなく、歌を詠んで天皇を讃えます。皇后が恐れたのは、皇位継承を争う皇子たちの誕生でした。彼女の嫉妬が功を奏したことは、仁徳天皇以後の系譜によく表されています。『万葉集』卷二「相聞」部^{そうもん}の巻頭には、時代的にもっとも古く、彼女の作とする歌が四首連作で掲げられています。一首目は、

君が行き日長くなりぬ山尋ね迎へか行かむ待ちにか待たむ

君之行 氣長成奴 山多都祢 迎加将行 待尔可将待

八五番歌

と、「あなたがお出かけにならずいぶん経ちました、山を訪ねて迎えに行きましようか、そのままお待ちしましようか」と悩み、後の歌では待ち続けることの切なさを嘆きます。

『古事記』には、皇后としての政治手腕として用いられた嫉妬が、『万葉集』には内に秘められた愛情として表現されています。 【『City Life』 2019年11月号北撰版掲載】